

公旅紀行について

1

「公旅」という名称は、筆者が勝手に作ったもので、適当な用語であるかどうか分らぬが、要するに個人の意志で行う旅ではなく、主君などに随従して、公式行事としての参詣等の一行に、参加する旅の意である。

近世紀行文をまとめて紹介した最も早い時期のものの一つに、明治版帝国文庫の三冊の紀行文集があつて、長短百編近くの作品を収める。これについて中村幸彦先生は、

「例えば明治に出版された帝国文庫には、三冊の紀行集がある。所収は中世のものを若干収め、中には橘南谿の『東遊記』『西遊記』の如く俗文のものをも合せるけれども、殆ど歌人俳人、国学者漢学者の筆になつた、この章で言う伝統文学系のものばかりである。読んで千篇一律類型的、唯に味気なさを残すばかりのものが多い。これは近世の雅俗意識による選択として見過し得るも、その後の日本文学史に於て、これら以上のものを採り上げたのを聞かないで今日に及んでいる。」(中村幸彦著

板 坂 耀 子

述集第二巻「俳言とその流れ」

「旧帝国文庫に三冊の紀行文集があつて、大半は近世のものであをが、この編者の選択基準も、今日の研究者と同じであつて、一つとして面白いものがないこと、そのことのみは私も研究者と同感であるが、一度近世紀行文学のしばらくされたその標準を脱却すれば、近世には、それらより遙かに面白い、いう処の旅の新鮮な驚きと情趣を、あらわに伝える著述に、不足はしないはずである。」(著述集第十三巻「近世圏外文学談」)

と批判される。

帝国文庫の採取基準が、和文の伝統的紀行偏重に傾き、中村先生が指摘される俗文を駆使した、より面白い紀行文がとりあげられていないことは認めざるを得ない。しかし編者岸上質軒は、その紀行文集統編(三冊は正・続・続々となっている)の序で、

「本編収むる所の紀行文。長短四十七編。年代を以て之を次序す。変遷沿革の迹を考ふるに便せんが為なり。貫之朝臣の土左日記は。紀行文の祖と称せらるゝも。単行の本も少からず。はた文詞古晦にして。解し

難きふしもあれば之を省き。厳島御幸記をもて貫首に揚げぬ。」

と述べていて、「紀行文の祖」土左日記を「文詞古晦にして、解し難きふしもあれば」除くというような一応の新しい基準を持っていた。中村先生も認められる如く、正編では橋南谿「東遊記」「西遊記」、大淀三千風の「日本行脚文集」、菱屋平七「筑紫紀行」、菊岡沾涼「諸国里人談」など、いずれも従来の紀行の標準からは若干外れたものを収録しているところにも、その意識の一端はうかがわれよう。

限界はあるものとしても一定の新しい見解のもとに選択されたものとして、改めて三冊の帝国文庫紀行集を見る。正編は先述の通り「東西遊記」以下の長編五作である。続編と続々編は、それぞれ四十七編と四十四編、計九十一編の、中・近世の短編紀行を収めている。

いわゆる公旅随行紀行はこの内、「続紀行文集」で三編、「続々紀行文集」で六編、計九編で、ほぼ一割を占めている。これを多いと見るか少ないと見るかは、人によっても様々だろうが、俳人紀行から女流紀行、短期の遊覧記から長期の地誌に近いものまで、かなり多彩な諸作品が収録されている中では、私は多いと判断する。近世を中心に、ある程度新しい基準を設けて紀行文を収録していくとする時、公旅随行紀行がこれだけ入ってくるこの意味は何か。その内容と特色を、いくつかの作品についてふれつつ、考えてみたい。

2

まず「紀行文集」続編と続々編に収録された各公旅紀行の内容を見よう。

「続紀行文集」

高倉院厳島御幸記・治承四年。久我通親。高倉天皇が安德天皇に讓位

後、厳島に行幸した折の随行記。

富士紀行・永享四年。藤原雅世。將軍足利義教に随行した富士見の記。みるめのさち・文化十三年か。成島司直。徳川家慶が川崎大師に参詣した折の随行記。

「続々紀行文集」

鹿苑院殿厳島詣記・康応元年。今川貞世。足利義満が厳島に参詣した折の随行記。

北山行幸記・応永十五年。一条経嗣。後小松天皇が北山に行幸した折の随行記。

富士御覽日記・永享四年。柴屋軒宗長。藤原雅世と同時のもの。

日光山紀行・元和十三年。鳥丸光広。家康の遺骸を久能山から日光に移す際の随行記。

小金の御狩・寛政七年。成島峯雄。徳川家斎が下総小金が原に狩をした際の随行記。

厳島参詣、富士見、日光参詣、等内容は様々である。さてその創作動機であるが『富士御覽日記』の末尾に次の様にある。

「諸大名御供衆。其の外の外様衆。奉公奉行集。旅着雨笠卅本づゝ。人夫三十人。下男以下白米雑事雑具各同じ。如此味細の事しるし候事。如何にては候へども。昔の御大儀をもしろしめさん為にて候。御分国は当国までにての御事にて候ひける。其内寺社本所領御成敗にあらず。如何此の如くの御まかなひ御申し候ひけるや。諸大名宿所には御風呂湯殿の御用意。御樽廿荷卅荷。糞物以下毎日の事どもを。臨川坊海什。具に物がたり候ひし。語るやうに覚書にて候。只昔の事を委しく御知り候へば。自他の忠をもしろしめすべく候。委細に御知り候て扱御知り候はぬやうに。何事も又大やうにや候ふべからん。大名にも高下品々御わたり

候へば。実にも御供衆外様奉公衣どもの次第分け／＼。御知りて肝要候。此一冊にも細川下野守。同右馬頭。山名中務大輔などは御供衆と見え候。爰元生れかはり候て。無案内のみにて有りげに候。都鄙みだれ果ん事は。何事も／＼差異なり候はぬやうには候へども。昔よりの次第は御存じ候てはよく候はんずらんと。注候てはよく御座あるべきと存じ任せ申上候。返す／＼物知りがほ。一笑々々。」

公旅紀行というには少々問題があるので先の表では除いたが、「続紀行文集」所収文和二年二条良基『小島の口すさみ』もその末尾にこう記す。

「此の度の儀に適ひたる勸例。殊にめでたしとぞ沙汰ありし。斯やうに例し少なかりつる世の式。後の物語りにもと思ひて。ありのまゝの事を。旅寝のつれ／＼に忘れじと。畳う紙の端など引破りて。書きつけ侍る事もいと見苦し。過行く方も忘れ難き習ひなれば。斯る一筆の言の葉も。自から忍ぶ草の種とはなか成り侍らざらん。」

ともに、行われた公式行事の記録を記しとどめることを紀行作成の主要な動機とする。また『道芝の露』は冒頭に長文を費して、將軍の日光参詣の一行に加えられた喜びを語り自家の子孫に伝えるために旅の記録を残した旨を述べる。

「此度は私の行かひならねば。路芝の露ばかりをぞ浅ましう書連ねんや。まいて公の筋は恐れ有るのみかは。束短かき筆の記し付べきにも有らねど。享保十三年卯月に。日光の御宮に御詣での時。我父君の同じ列なる御供に召具せられつゝ御自らは承り置く事のおはして参り給はぬに定まりける頃。故の主殿の頭意行朝臣の許へ申し給ひし、

味気なくかしの雪とふり果ん黒髪山も登り得ぬ身は

さこそ思ひ暮し給ひけめ。早う此一種なん心に止まりて。思ひ出る折

にはさすがに胸あかぬ事にぞありし。さるを今年正月十六日に召されて此度の御供に召し加へられぬるかしこさ。同じ列も有らねば。日毎に御供に仕つれ。されど年も古りぬ。公の暇あらん折々は。乗物にて一里二里は憩ひて参るべしと。此御供の事など承はれる水谷勝富の主して。但馬守御目附にも殊更に申し断らしめ。兼て水野の朝臣の後へより我従者槍乗物などをば続けたる有難さ畏さは。我父君の本意とげぬる心地せられて。昔常に帯び給ひける刀を帯び。又詠み給ひし神祇の和歌親ら書かせ給へるを乗物の前に掛けて。諸ともに御供に仕奉る心構も。狭き袂に余れる御恵によりぬる事を思へば。いと嬉しうも畏く。是は其日記と云ふにもあらで。我子草の末葉にも語り継ぎつゝ。漏れぬ御恵の露かゝる事どもを仰ぎ奉れと記し置くなり。」

父が行けなかつた旅に自らが行ける喜びとそれを更に子孫に伝えようという思いが創作動機となっている。

更に注目したいのは『みるめのさち』冒頭の次の記述である。

「弥生の末つがた。御前の花の梢どもは大かた青葉がちになりて。南の風薫り涼しく。まだき時鳥の初音またるゝ頃。海づらの見るめもゆかしきに。西の御所。河崎のあたりに御馬を試み給はんとて。侍ふ人々の中にも。馬にて供奉するきは。誰は月毛彼は鹿毛栗毛など召定めらるゝを聞て。例ののどめあへず。御供の事ねぎまゐらせしかば。去年玉河の折のこと思召いで。こたびも御道すがらの事ども記し奉れとの仰せ言を。大隅守景元傳へしかば。

玉河の浪のもくづをかきつがむ筆の光は磨き得ずともと独うめくもあふけなく。その日は廿あまり三日なりけり。」

ここでは作者成島司直は家慶の川崎大師参詣記を記すよう上司から命ぜられて一行に加わっているのである。

『みるめのさち』の文中で、「玉河の折のこと思召いで」とあるのは、いわゆる天保三年の『玉川紀行』『玉川御供の記』『玉河道の記』等の書名で知られる随行記のことで、『甲子夜話』^{註1}続編九十五に収めるものでは、次のように記されている。

「(前略) ことし(天保三壬辰) 秋の暑もやう／＼うすらぎ、初鴈がねもまたるゝ頃、西の御所かしこに逍遙し給ふ御あらましなりと聞ゆ。こは享保宝暦の頃ならせたまひし後は、久しくわたらせ給ふこともきこえざりしを、これも絶たるをつぎ、廢れたるを興させ給ふ御政の一なるべし。やつがれものどめあへず、安房守忠明(内藤)につきて大殿の御かたへ、この御供つかふまつらん事をねぎしに、御道すがらの事書しるし奉るべしとの仰ごと下りぬ。せばき袖には包みかねぬるかしこさにて、浮木の亀の日影みし心地せらるゝもあまりなりや。」

「播磨守俊光、安房守忠明よりつたへしは、道の行手の事しるすべき仰ごとかうおれば、道しるべする人も定め置ぬ。御さきにまかり、歌枕よく見よと聞ゆ。かくて鳥見方の下つかさをぐしていでたつ。この下司一人にて案内せんは、たど／＼しく心もとなしとて村長一人よびつれてゆけば、いとたのもしき心地せらる。」

「さてもけふの御供に加へられ、年頃の本意とげしはさる事にて、ありがたき仰ごと蒙りしかたじけなさば、涙もよ／＼とうかび侍るばかりなり。さるは寛政の半、今の大殿いと若うおはしましける頃、下総の小金のはらに猪鹿の御狩し給ひし時、父なりしが御供して、やまとぶみつくりて奉るべき仰ごと有しためしもおもひ出て、かしこさに袖のみしほりそへぬるあまり、忠明のもとへわたくしに申侍りける。

世々絶ずかゝるめぐみは玉川の

なみ／＼ならぬためしとぞ思ふ

と心の底につゝみかねて、おもふこともらし侍るぞ、すぐ世つたなき下種のしわざならんかし。」

ここでは司直は紀行制作のための一定の独自行動を許されている。また、その記述から『小金の御狩』も同様の状況下に記されたことが推測できよう。文中「父なりしが」とあるのが『小金の御狩』の作者成島峯雄である。

先の帝国文庫所収の公旅紀行の一覽表で、後半になると成島家の作品が三点まで登場する。三代道筑(錦江)以来、將軍家の侍講を勤め、和歌の方面にも活躍したこの一家の、公旅紀行とのかかわりの深さがしのばれる。特に紀行に限らない。『甲子夜話』卷二十六には峯雄作の寛政相撲上覧の記があり、司直に「唐の大和の道しるべをうけ」たと自ら記す^{註2}新見正路の『みよのひかり』は天保十二年に將軍が吹上御苑で催した鉄砲競技の記録である。こういった公式の催しの際に命じられて歌文を奉じるのは、他にも北村季文などがある。そして、これらの記録文は、「一日(乙未五月)、用輶、書を贈る。曰。附せし小冊は、過し頃、内府公川崎へ御遊行のとき、成島司直、旨を奉じて記せし所なり。寛覽して返されよと。予^{すなはち}遇、日を連ねて写し得。」(『甲子夜話』三編十六)

といったかたちで人々の間に広まり、

「道のゆく手の名所どもは更なり、古しへ今の沿革をさへかうがへしるし、また騎馬にて御ともつかふまつれるきは、小老申次の人々をはじめ、近習外様にいたるまで姓氏を録し、巻のはしつかたにうつし絵を添たれば、その月のさま残るくまなく、空飛鳥のあみをもれたるうらみもあらず。この巻一たびひらけば、閤^{しきり}を出ずしてそのさかひにいたり、

雲るなすあたりのみありさままでもまの当りみるにことならず。くれ竹のよゝにつたへて見ん人々のみるめの幸とは、むべ是をこそいふべけれ。」(『みるめのさち』後書、新見正路)

「おのつからずし出せるからの大和の題ともかすくあり正路朝臣その日のことゝも詳にしるしたる文の中にこの歌とも書加へ一巻とせらるをのれこれをくりかへしみるに君の仰も御心をあはせて一度ははり一度は弛る文武の道を掟玉ふハさることにて政をなして心閑なりと唐題につゝりたるかよくもこの時にかなへることゝめて思はるゝまゝに」(『みよのひかり』後書、成島司直)

とのように、評価され鑑賞されたのであらう。

古くは中世の『富士御覽日記』『小島の口すさみ』から、公旅紀行は公式行事を知識或いは思い出として後世に伝えることを目的とする。それはまた成島和鼎の記述にある如く、それに参加した者の誇りとして子孫に残す記録としての性質も帯びる。それが個人的なものでなく、命ぜられて記す記録になると、当然参加した全員に対してその役割をはたすことが要求されるため、「近習外様にいたるまで」姓氏を録していくことがまた必要ともなるのであらう。更に新見正路の後書は「この巻一たびひらけば、闕^{しき}を出ずしてそのさかひにいたり、雲るなすあたりのみありさまゝでもまの当りみるにことならず。」と記す。前半は紀行文を賞讃評価する際のいわば常套句であるが、後半は、公旅旅行が公式行事に参加できなかった者にその代償作用として享受され、与えられるものであったことを示している。

このような状況のもとで記される公旅紀行の数々は、では、どのような性格を帯びるか。

帝国文庫所収の、またその他の公旅紀行を一読してまず印象づけられるのは、当然ながら、強い現実肯定の姿勢である。

「我君。天日嗣しろしめしてより以来。廿年余り七かへりばかりにもなりぬらん。五の風十の雨も時を違へず。八島四の海の波もおさまりで。君も臣も身を合せ。魚と水との思ひをなしたる時なれば。唐堯の鼓も苔深く。劉寛が轡も蒲くつるばかりなり。されば斯様に久しく保たせおはします事は。往昔の応神仁徳欽明推古などは。神代も遠からず。時もすなほなれば申すに及ばず。文武天皇より年号なども定まりたる事に成りて後は。醍醐の御門こそ三十三年まで御位にて在りしが。此時にこそ格式など云ふ事をも定められたれ。実に聖徳の至りは。延喜の古へも応永の今も同じかるべし。是は偏に准三后世をまつりごち給ひて。君を輔け民を撫づる御恵み。高麗唐土までも従ひ奉る程の御勢なれば。聖運武運も彌よ栄えますますにこそ。此十年許りより北山の御所に遷り住ませ給ひて。將軍右大將をばおほやけの御警固近き衛にと。都に置き申されたるも。いと畏き御掟とぞ覚え侍るに。扱も行幸は応永十五年弥生の初めの八日也。鳥の歌ふ声花の笑める色も実^{まこと}に栄ゆく春と見えた^みり。」

『北山行幸記』の冒頭である。このような現世礼讃は近世初期の名所記類もよく冒頭にかかせる決まり文句であるし、公旅紀行でなくとも、

「かく靈境を見めくる事ひとへに

君恩^{キミオン}の餘^{ホト}沢なれハ有かたき事限りなし」(寛政二年 磯谷正卿『日光紀行』)

「かく名だかき所々をめぐりてながめたるも、おさまれる御代の

かしこさとして

ものゝふもしづかなるよのためしにや

紅葉にくらす秋の山々

と一陽がよみてこしけることのはは、げにことはりなりと思ひやりて、御代の恵のかしこさをあふぐにも猶あまりあれど、またものゝふの道のゆるみではと、いさめてかへしつかはしける。

あづさ弓今日は紅葉にくらすとも

心ゆるすなもののゝふの道

成著」(文政六年、牧野伊予

守『高雄紀行』)

などといった表現は近世紀行では常套化する。とりわけ日光参詣紀行に於ては、

「渴シテ飲み。飢テ食フ。孰レカ烈祖ノ徳ニアラザル。サレバ貴トナク賤トナク。誰カ日光ニ詣フデザルベキトテ。」(嘉永二年、稻村処士

『二荒紀勝』)

と強い徳川家礼讃となることが多い。

しかし、公旅紀行の場合の現実肯定はたとえば、

「昔も厳島には。高倉院御幸なり。平のおほいまうち君も。度々詣でられしためしも侍りけめども。此の度は引かへて珍らしき御姿どもにて。花田色に目結とかいふ紋を染めて。袖口ほそく。裾ひろき打掛といふものを。同じ姿に着給ひ。赤き帯に青色のはゞき。赤色の短き袴なり。御供の人々皆三尺ばかりなる金刀どもさゝせらる。傍の人は誂り侍りけめども。斯やうの事はあながちに法も式も定まらず。たゞ時代に随ふ事ぞかし。今やうなどゝて定まりたる器などをだにも。始めていいだして用ゐらるゝ例。古へもなきにしも侍らねば。誂りは却つて道せばきなるべし。」(『鹿苑院殿厳島詣記』)

と先例と異なる儀式の様を擁護したり、次のように、きわめて細かく具体的なかたちで現世の繁栄を確認することがある。

「世の中の事どもの聞きしに違ふは今に始めずかし。享保の度になにがしは水に乏しかりき。くれがしの従者は二日一夜そかてたえしなど。年月を経て見ぬ空言なども語り続けるを聞きつる事もあれ。飲食ふ物の二くさは露の間も無くて有らんやとはとて。此度は米を葛籠にも入れて馬に負せ。又は乗物の中にも餉やうの物の。何くれと心設けしつゝゐて立ちつ。さて此方を離れて行くゝ河口の駅に懸る程。先づ従者の喰ふべき物や是有ると目止めて見るに。強飯団子などふさに有り。爰は又江都を距るゝ事の遠からねば斯うこそなど。心を遣りて行く道すがら。乗物にして彼の持りし物取出て是とて従者を召すに。むらどものふくみたる声して答へたるが怪しと見れば。いつの程にか。むさゝと物打喰つゝくるなりけり。斯く何處も皆食物ども設け。酒などをさへ売るめり。さるは公より米許多村里に下し給はりて。価はさまれ此度行きかふ者の乞るに任せよとて。予てより事承はる司どもに仰せ下さるとや。又一里ばかりが程々に。土を堆く築上げて広う芝など麗はしう植て。板屋の左右見入の方をば蘆の簀して打囲み。中に床几二つ三つ立てたる水屋あり。新たなる樋どもに清き水汲湛へて。青磁やうの物幾等となう添たり。又其間に同じさまに構へて。是は御馬の口を洗ふべき料とす。是は上家のみを殊に麗しうして。新たなる樋多く重ね上げて。皆清き水をぞ湛えたる。又は一里或は其半にも榜示建て。何處より何處までと行程委しう記せり。都て斯る類の事ども。此度は取分けて殊に事を加へられつれば。彼の米など齎らしつる我あらましは徒になりぬ。誰も斯りけんかし。さ云へど是は聞きし事どもありし例しに。考へてよき方の昔に超けるぞかしこきや。何はの事に付て是も彼も。掌の中なる物を転す如事行きけ

る。かしかうも道弘き時に生れ逢ひ奉りて。蓬が本までも斯く露の恵の深きこそ。げに此御蔭にます蔭ぞなき。」(『道芝の露』)

『道芝の露』の場合、日光参詣記という事情を若干考慮する要があるとはいへ、一般に公旅紀行の現実肯定が形式だけの文句ではなく、細かい事実を踏まえた上での確認として記されていることは否定できない。その根底にはむろん、將軍家なり天皇なりの榮華と安定を表現しなければならぬという、政治的姿勢ともいっていい、一つの配慮があり、視線の枠がある。公旅随行紀行のすべてには、その配慮があり、枠がかかっているともみてよい。

だが、それでこの種の紀行文作家たちが無理をしているとか、不自然な記述を強いられるとか私は言うつもりはない。事実はむしろ逆であって、そういった姿勢、配慮こそが、こういった旅の実態を描くのに最も自然で、適していたと考える。紀行文作家たちにそうした姿勢をとらせたのは、各自の立場や上司の命令以上に、この種の旅をしている時の体験であり、実感であり、何よりもそれが、そういった姿勢を支えたのだと思う。

それは第一に、旅や行事そのものの豪華さである。年を追って華美になってゆく日光参詣に典型的に見られるように、時の最高権力を持つ人々のこういった典礼の一つ一つは、その当時最高の華美さを常に備えて人を圧倒し、魅了した。

「先づ初夜の御法事。妙香の香。煙たきまで燼り満ちて。花は四種にぞ散りまがふ。梵音は迦陵頻伽の声恥かしく。むつの輪の響きは。六道の衆生も実に苦を免れぬべくぞ聞ゆる。大衆の回向有がたく。涙も堰あへぬぞかし。」(『日光山紀行』)

「法席過ぎて河越の城主酒井備後守。捧物にあし多く積上げられたる

は。山も更に動き出でたる様に見えたり。」(同上)

「御かたはら近き人々心々に染出せる狩の装ひ。とり／＼珍らかに花やかなる事言はん方なし。春の夜の闇はあやなしとは斯るをこそ言はめと笑みさかへらる。」(『小金の御狩』)

「御左の方は亀井駿河守。吉川一学。此四人は騎馬にて仕ふまつる御狩場の事承はれるによりて。享保の御例に従ひ。綾蘭笠を召されて着したり。次に左り御小納戸矢橋熊之助。右御馬預諏訪部文右衛門。御馬の口に添ひ奉る。此次に成らせ給ふ。白金の筋きらめきたるを紫のうすものにてはり。裡の方黄金の箔おきたる御笠召さる。是は鎌倉の古き型をうつされたるよし。緋の御陣羽織。御後ろの方に葵と云ふ篆字を。御裾のあたりに二葉の葵を。同じく金糸して織入れたるに。蟠龍を織りたる天鷲絨の御袴。浅黄縞子の御臈当御毛沓を奉り。芦澤と云ふ栗毛のたくましき良馬に召され。許多の人にかしづかれ渡らせ給ふさま。誠に今日の御狩は鎌倉右大将の富士の狩場に似通ひたりと雖も。御仁徳は享保の賢き昔しをうつし。治まれる世に武の道を盛りに輝かせ給ふ。御政。あな賢し／＼とぞ拝まれさせ給へり。」(同上)

もとより、こういった華やかな公式行事の記録は、源氏物語、枕草子、宇津保物語、大鏡などの王朝物語、歴史物語に古くから存する。文学として一つの伝統を持つものでもある。しかし、公旅紀行の場合、それらの先行文学にはおそらくあまり見られないもう一つの要素が加わる。それは、そのような華やかな行事を心から尊仰する庶民たちの描写である。これらは事実に基づいていようし、そういった見聞が、公式行事そのものの荘麗さとともに紀行文作家たちの現世肯定の姿勢を支える大きなもう一つの実感となったと思う。

「とりわけ近衛の陣は。大将を始めて左右の次将とも。御興近く打圍

みて。駕輿丁の御先の声なども。今更珍らかなる心地す。麗しう動きなき御輿の裡も。実にめでたく忝けなし。されば怪しの者共までも。手をつくりて額に当てつゝ見奉りあげて。己が顔の成らむ様をば知らで。笑みさかへたるもいと嗚呼がまし。」(『北山行幸記』)

「かくて三島に着かせ給ふ。供奉の行列昨日にかはらず。六十餘國の人。我先にと集ひたるべし。菅笠を脱ぎて額に手を当て。神輿を拝み奉らぬ人なし。」(『日光山紀行』)

「いやしきあき人のよき衣きたる女子らまでも、家の前に居なみぬかづき奉る様めでたし。」(『玉川御供の記』)

「此あたりのものども、老たるも若きもおさなきも、みなはいりの外へはらばひ出つゝ御よそひをおがみ奉りて、よろこびあへるさまども、げに治る御代のしるしなりけり。」(天保三年、新見正路『玉川御道の記』)

「君には鳴巡といへる月毛の駒に召る。たけき御さまながら。あてに優なりと見奉るは心がらにや。木陰垣根がくれに居並て拝み奉る賤山がつなど。おのが顔のならんさまもしらず。あな尊と手を合せて。神の影向し給ふ如。涙流し拝み奉る道理なり。」(『みるめのさち』)

この様な記述は枚挙に遑ない。自分たちには垣間見ることもままならない華やかな世界の人々を、民衆は素朴に拝跪する。そうされることによって逆に紀行作家たちは自己の住む世界の華やかさと正しさを確認し、実感をこめた現世肯定が生じてゆく。この種の贅を尽した旅と、それを崇める民衆に対し、別の視点を持つことも理論的には可能であるが、やはり至難といつてよく、普通の人間にとっては不自然なことといつてよい。目の前に生じる事実のみを素直にうけいれ、自然に感情を吐露するならば、ゆらがぬ現状の安定と、そこで満足して生きている人々

の姿は、公旅の中では、決して幻とのみは言いきれず浮かび上がってくる図式であり、それを認め、基本として記述していくことが、最も無理なくこの種の旅の実態をきめ細かく描き出していくこととつながる。『道芝の露』は次のように記す。

「爰より山は左右に近づきぬ。松檜様々の木ども高う生ひ茂れる中を分つゝ。弓鉄砲列を数々打擔げて警固し参る。雨の猶降るに綿を乱したらん様なる雲の。幾片となく浮立て。左には井里山。こかの嶺。鞍懸。かはほり。羽黒。右は飯盛。篠井。たかちなど。余りに近う重りたる。晴なば御覧すべき珍らしきをなどひそやき合ふ。松杉の並立ぬる隙々より見れば。此日比此近き遠き境をも分かず。集ひ来りて堤の小草或は畑の麦を敷て露にそぼちつゝ。おちうばむまごを抱き左右に並居て。あな尊とゝ見奉るべし。又は念珠を額にあて。又はからておしもみて拝むもあり。或は程の遠かりしにや笠をば肩に掛けて。畔を傳ひ畑の中を走りて来るに。御先の人々声は立てず。唯立ぞ走るなとて手して制するを。斯る事も知らねば。己れ遅し疾く参れとて。招かるゝとや心得らん。笑を含み汗押拭ひなどして。猶走り来るに。間近く制せられて。麦の生茂れる中にふと隠るゝも。よそめにはさすがに興あり。」

沿道の民衆と將軍の行列との交流が、生き生きと明かるく描かれる。

「日光御詣の御道傍の畑は、麦作の畦のなりやう必ず堅畦にして、横畦なることなし。横なれば、人潜に麦間に隠れ居らるゝゆゑ、堅畦にして見通しに成るやうに為ることなりと、或人語れり。」(『甲子夜話』巻四十三)といった緊張関係をうかがわせるものはない。それは一つの限界であらう。しかし現世肯定の立場を、旅の実感によって支えられながら貫きとおしていくことによって、成島和鼎をはじめとする公旅紀行の作家たちが、「旅の憂い」を基調とした伝統的紀行から離れ、公式行事の

記録文学の伝統とも結びつきつつ、旅と時代を幸福なものとして描きあげようとしたこと、そのために新しい旅の現実の観察と描写を獲得していったことは、評価しておかねばなるまい。^{註4}それは、近世紀行全体の持った方向とも、多くの点で重なりあってゆくものである。

註

- 1 松浦静山の随筆。東洋文庫による。
- 2 「そのれはやう司直に唐の大和の道のしるべをうけて恵浅からず。」(『みるめのさち』後書)
- 3 江戸時代に十八回行われた將軍社参の随記をはじめ日光参詣の紀行は多く、記事内容も重複するため、作者たちは先行作品や互いの作品をよく参照しており、訂正批判もしばしば行う。したがって記述は細かで具体的になりやすい。
- 4 『道芝の露』における將軍社参の際の舟橋の説明をはじめ、公旅紀行には具体的で精細な表現が随所に存する。